



伝統の製法を守る薩摩ツゲ櫛

話し手 ツゲ櫛職人

木原 修三さん (昭和22年9月16日生)

聞き手 鹿児島県立山川高等学校 生活情報科 1年



鹿児島(薩摩)におけるツゲ櫛づくりの歴史

江戸時代に木曾川の治水工事に行った薩摩の足軽が、向こうでツゲ櫛づくりの技術を覚えてきて薩摩に伝えたという話です。

以前は鹿児島市の草牟田にも4~5軒、櫛屋さんがあったみたいですが、今鹿児島には、私の他に指宿にもう一か所の2軒だけになりましたね。鹿児島市もなくなったようです。

原料のツゲは南方系の木で、現在は南薩地域(頰娃や南九州)で育てられています。ツゲ材は、櫛に加工されるほかに、印鑑や将棋の駒の材料として使われるんですよ。



手作りツゲ櫛ができるまで

最初に、ツゲの原木を買ってきて板状に製材加工するんです。

次は、製材した板から水分を抜くために、1ヶ月くらい天日乾燥します。そうしないとカビがついたりしますからね。それが終わったら、乾燥段階で曲がった板を蒸気にあててまっすぐにします。蒸気にあてたら木が柔らかくなるんですよ。その後、おがくずで2~3週間いぶします。虫とかカビがつかないようにです。

燻製にした後は、5~6年寝かすんです。まあ、そのうち1~2年に1回は、曲がったのを蒸気にあてて燻製してを繰り返すんです。それから櫛に加工していくんです。まず、作ろうとする櫛の形に板を切った後、「櫛引き」といって、機械(円盤のこ)で櫛の歯を作っていく。その後にヤスリとか「砥草(トクサ)」っていうサンドペーパー代わりの草を使って、歯と歯の間を仕上げていくんですよ。それが終わったら、持ち手が必要な櫛は持ち手を仕上げ、全体を磨けば、形の加工は終了。最後に、できあがった櫛を椿油に



1週間つけ込むんです。そうすると、日に当たっても櫛が曲がりづらくなりますし、なにしろ色が綺麗ですもんね。あと、椿油は髪にいいので髪の保全にもなるので。これで、ようやくツゲ櫛の完成です。

ツゲ櫛づくりに使われる道具

まず、櫛の形を削り出すちっちゃんカンナ。ほとんどが父の時代から使っているものです。

それから、歯立ての機械(電動丸刃ノコ)。これはたぶん昭和より前、大正時代の機械だと思っただけど、細かい歯を引く時は、ブレないように勘でうまく調整しなければならない。そして、櫛の歯を磨くためのヤスリ。これは鍛冶屋さんで金属の三角の棒を作ってもらってから、父がヤスリの溝を刻んだんです。これで8分目くらいまで磨いたら、砥草で作ったヤスリを使うんです。庭に生えているのを乾燥させて、それをいったん水に戻して柔らかくしてから、木の棒に巻きつけて貼る。茎の表面がざらざらしたヤスリになるんですね。細かい仕上げに使います。この砥草は昔からいろんな磨きに使ったみたいです。



ツゲ櫛の特長

第一にツゲの櫛は天然素材で静電気が起きない、だから髪に優しいんですね。

それに髪結いさんの話だと、鬢付け油をつけながら使うので、プラスチックの櫛はべたついて仕事にならないんだけど、ツゲの櫛だと持った時に滑らないということです。あと、うちのツゲ櫛は最後に椿油につけるから、色がべっこうみたいに味が出てくる。椿油は昔から整髪料としても使われています。ほかに櫛を油につける利点としては、櫛が曲がりづらくなるということもあります。



ツゲ櫛づくりへの思いとこれから

買われた方が「すごく使いやすい」と言って、また買いに来てくれるのが一番うれしい。それから、自分で納得いくものができたときはうれしいですね。たまにしかありませんが、とにかく、作るのは楽しみです。だけど商売は大変。

今のところ後継者はいなくて、何歳までできるかなって感じるようにはなりましたね。まあ体が動くまで続けようと思います。

聞き書きコラム



ツゲについて

指宿市周辺の地域ではかつて、女の子が生まれるとツゲを植え、その子がお嫁に行く際に伐採して使用していたという。温暖な地域で生育するツゲは、南薩地域での栽培が適していると考えられている。栽培の際は、ネコなどが爪を研いで傷をつけてしまうと、材にシミができてしまうため、幹に竹や藁を巻いて大切に育てる所もある。